

カフカの『ある犬の探究』（1）

—音楽犬と食物の探究—

佐々木 博康

*Kafkas Forschungen eines Hundes* (1)

—Musikhunde und Nahrungsforschung—

SASAKI, Hiroyasu

大分大学教育福祉科学部研究紀要 第37巻第3号

2016年3月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE FACULTY OF

EDUCATION AND WELFARE SCIENCE,

OITA UNIVERSITY

Vol. 37, No. 3, March 2016

OITA, JAPAN

## カフカの『ある犬の探究』(1)

—音楽犬と食物の探究—

佐々木 博 康\*

**【要 旨】** 本論文は、カフカの未完の短編『ある犬の探究』(1922)を、作者が自分の人生を寓話的に描いたものと捉えることで、物語全体がどのような問題を扱っているのか、またどのようなつながりによって構成されているのかを示すものである。ここでは、まず、語り手の犬(=探究犬)の音楽犬体験が何を意味するのか、次いで、音楽犬体験以後、語り手の犬が食物探究に向かうのはなぜなのかを明らかにした。音楽犬体験とは、東欧ユダヤ人たちのイディッシュ語劇から受けたカフカの衝撃を表現したものであり、この芸術体験に刺激を受け、カフカ自身も「書くこと」を通じた自己表現を志すようになる。探究犬の食物探究の中心的問い、すなわち、「犬族は何を食べて生きているのか」という問いは、「人間は何に支えられて生きているのか」という問いを言い換えたものである。つまり、それは人間の実存の意味への問いである。

**【キーワード】** 音楽 イディッシュ語劇 書くこと 実存

### はじめに

『ある犬の探究』(以下、『探究』)は、『断食芸人』の後に書かれた、カフカの主要な短編の一つである。短編としてはかなり長いものであるが、未完に終わっている。

『探究』が書かれたのは、1922年のことである。この年、カフカは1月末に三つ目の長編『城』の執筆に着手し、また続いて『最初の悩み』などの小品や多数の断編を執筆した。5月23日ごろに『断食芸人』が成立する。『城』の執筆は続けられるが、8月20日ごろになって継続が断念される。その後、9月18日過ぎから10月の終わりごろまでに書かれたのが『探究』である。

物語は、一人称の語り手の老犬(以下、探究犬)がこれまでの人生を回顧する話で、人間はまったく登場しない。語り手の犬は若い頃に七匹の音楽犬たちと衝撃的な出会いをし、それをきっかけに食物研究を開始する。研究を究めるために自ら断食実験まで行うが、何の成果も得られず、血を吐いて気絶する。気がつくと目の前に狩人犬がいる。その場を立ち退くように求める狩人犬とのやりとりの中で、探究犬は狩人犬が歌を歌っているのに気づく。狩人犬との出

---

平成27年10月14日受理

\* ささき・ひろやす 大分大学教育福祉科学部情報国際教育講座(ドイツ文学)

会いの後、探究犬は音楽学の研究に目を向けるようになる。空中犬という奇妙な存在も登場する不可解な話である。

『探究』についてのこれまでの主な解釈としては、探究犬は狩人犬の歌を通じて「真理と自由への突破」<sup>1)</sup>を経験するとするヴィルヘルム・エムリッヒの哲学的解釈、犬が人間を知覚しないことは人間が神を捉えることができないことのアレゴリーであるとするジョン・ウィングルマンの神学的解釈<sup>2)</sup>、人間の存在を知らず「滑稽な思弁」<sup>3)</sup>に陥る探究犬は、認識の限界を自覚しない人間の風刺であるとするリッチー・ロバートソンやペーター＝アンドレ・アルトの解釈<sup>4)</sup>などがある。また、この物語に詳細な注をつけたビンダーは、犬族をユダヤ民族と関連づけているが、特に空中犬についてユダヤ的なものと結びつける研究は近年も盛んである<sup>5)</sup>。ただ、さまざまな解釈が林立しているにもかかわらず、いずれも物語の特定の部分に着目した解釈であり、個々の出来事につながりをつけ、全体の流れを一貫したプロットのもとに捉えた、説得力のある解釈はまだ存在しない。

この物語はカフカの人生と強い関わりを持っている。たとえば、探究犬の音楽犬たちとの遭遇は、ビンダーやマッシーノらが指摘しているように、カフカの東欧ユダヤのイディッシュ語劇団員たちとの出会いを反映している。また、探究犬による食物探究や断食は、『断食芸人』の主人公の断食がそうであるように<sup>6)</sup>、カフカの文学的営為、つまり「書くこと」の寓意となっている。さらに、狩人犬は、筆者が別の論文で明らかにしたように<sup>7)</sup>、1920年にカフカが恋愛関係を結んだミレナをモデルとしている。つまり、カフカはこの物語において、これまでの自分の人生で大きな意味を持った出会いや自分が行ってきたことを振り返っているのである。

本稿は、この物語をカフカ自身の人生を寓話的に描いたものと捉えることで、物語全体がどのような流れになっているのかを明らかにするものである。それによって、カフカが「書くこと」に没頭してきた自分の人生をどう見ているのか、また、この物語が書かれることで、カフカの生の方向性にどのような変化が生じているのかが見えてくるであろう。

## 1. 共同体への異和感

物語は、今は老犬となった語り手の犬が、自分が犬族の中で異和感を抱えながら生きてきたことを振り返るところから始まる。

今思い返してみると、まだ犬族のただ中に生きており、犬たちの中の犬として、自分たちを悩ませるすべてのことに関与していた時代のことを呼び起こしてみると、詳しく見ると、ここには昔から何かしっくりこないところ、小さな亀裂が存在していたことに気づくのだ。畏敬を感じてしかるべき民族の催しのさなかに、軽い不快の念が私を襲った。それどころか、親しい仲間の間にいるときでさえときどきは、いや、ときどきではない、非常にしばしば、親愛なる同胞の犬を単に見るだけで、単に見るだけといっても、ちょっと新たな目で見るということだが、そうするだけで私は当惑し、恐怖を抱き、途方にくれ、それどころか絶望してしまったのだ。(423)<sup>8)</sup>

語り手の犬は、「民族」という大きな共同体から、「親しい仲間」同士の小さな共同体、さらに「同胞の犬」と二匹だけにいるときのような最低限の共同体に至るまでのあらゆる共同

体に対して異和感を感じてきたと言う。このような共同体への異和感は、カフカがしばしば日記や手紙で表明してきたことであるし、また『変身』を初めとする多くの作品で表現してきたことである。語り手の犬がカフカの分身であることは明らかである。

共同体に対する個人的な異和感の表明に続いて語られるのは犬族全体の問題である。

私たちは互いに引き寄せられる。この近寄りたいたいという衝動を満たすのを妨げるものは何もない。私たちの法 (Gesetze) や施設 (Einrichtungen) はすべて (……), 私たちに許されたこの最高の幸福, つまり, 互にくっつき合って温め合うこと (das warme Beisammensein) を求めて作られているのである。しかしながら, 反対の面もある。私の知る限り, 犬族ほどてんでんばらばらに生きている生き物もない。こんなにもたくさんの, まったく見通すこともできないほどの階級や種や仕事による違いを持った生き物はいない。くっつき合うことを望んでいる私たち——いろいろあるにしても, 熱狂したときには何度もそれができている私たち——, その私たちが互いから遠く隔たって, 隣の犬にも理解できないことが多い奇妙な仕事に就き, 犬族のものではなく, むしろ犬族に敵対するような規則を固く守って生きている。これはなんとという難しい問題であることか。できれば触れたくない——私もこの立場はわかる, 私の立場よりもよくわかる——問題であるが, 私はすっかりそのとりこになってしまったのである。(425-6)

長々と引用したのは, ここにこの物語全体のテーマ, そしてカフカ文学の最大のテーマが, きわめてわかりやすく示されていると考えるからである。「互にくっつき合って温め合うこと」を望んでいるにもかかわらず, 犬族は「互いから遠く隔たって」生きている。共同性を求めながらも互いに孤立して生きている。それはなぜなのか。また, 孤立を固定するような「規則」を遵守して生きている。それはなぜなのか。これが語り手の犬の念頭にある問題である。人間の問題に戻すなら, 人々が幸福になるようにと考案されているはずの共同体が, なぜ個人を幸福にしないのか, どうして個人は互いに融和せず, 孤独のままで生きているのかという問題である。語り手の犬は, これは「難しい問題」であり, 「できれば触れたくない (……) 問題」であるが, すっかり「そのとりこになってしまった」という。語り手の犬が他の犬たちと異なるのはまさにここである。共同体と個の関係の問題を考えずにはおれないのである。

なぜ私は他の者たちのようにしないのだろうか。自分の民族と仲よく暮らし, しっくりこないところは黙って受け入れ, 複雑な計算書の中のちっぽけなミスくらいに考えて無視し, 私たちを結びつけて幸せにしてくれるものの方いつも目を向けたままている, そして絶えず私たちを民族の輪から無理やり引き離そうとするものには目もくれない。なぜ私はそんなふうには生きられないのだろうか。(426)

こうして語り手の犬は, 自分が共同体に対する異和感を感じるようになるきっかけとなった体験に始まり, それ以後今日までの, 通常の犬とは異なる自分の人生の軌跡をたどり直そうとするのである。

## 2. 音楽犬たちとの出会い

共同体に対する異和感の表明にすぐ続いて語られるのは、子供の頃の音楽犬たちとの出会いである。七匹の音楽犬が「どこかの闇 (Finsternis) の中から、すさまじい騒音とともに」(427) 突然出現し、再び「すべての騒音と光ともども、もと来た闇の中に」(433) 消えていく。全体はまるで一つの幻想のように描かれている。

語り手の犬は、この音楽犬体験について、「当時の私に、初めての、拭い去ることのできないほど強烈な印象を与え、その後の多くのことの指針ともなった」(427) と述べる一方、「あのコンサートが始まりだった」(435) のであり、それが「若い犬としての至福の生活」(436) の終わりをもたらしたとも言う。探究犬が世の中に対する異和感を感じるようになったのは、音楽犬体験がきっかけなのである。

音楽犬とはどのような犬だろうか。

彼ら(＝音楽犬たち)は何も語らず、歌も歌わなかった。たいていは苦虫をかみつぶしたような表情で沈黙していた (schweigen)。しかし、虚無の空間 (aus dem leeren Raum) から音楽を魔法のように浮かび上がらせた (emporzaubern) のである。すべては音楽だった。足を上げたり下ろしたりし、特定の方向にいっせいに顔を向け、走ったかと思うと停止する、互いに位置を定めてフォーメーションを形作り、互いにつながりあって規則的に結合する、たとえばそれぞれが前足を別の犬の背中にのせて、七匹そろって前の犬が後ろの犬すべての体重を支えるようにしてみたり、あるいは床に体を伏せて匍匐前進しながら、一条の乱れもなく複雑な形を描き出す (……) (428)

犬たちは「音楽犬 (Musikhund)」と呼ばれるが、実際には音楽を演奏しているわけでも歌を歌っているわけでもない。彼らが行っているのはコンビネーション・パフォーマンスとでも言うべきものである。犬たち自身は「沈黙」している。にもかかわらず、語り手の犬が「虚無の空間」からの「音楽」を聞き取っている。犬たちが黙々と演じているパフォーマンスの根底に共通して流れるものを「音楽」として捉えている。

語り手の犬は音楽犬たちの集団的パフォーマンスのすばらしさに感嘆するが、全面的に肯定しているわけではない。「音楽」に圧倒され、翻弄されもする。

(……) あらゆる方向から、高いところからも深いところからも、いたるところからやってくる音楽以外のことは何も考えることが許されなかった。音楽は聞く者をそのただ中に引きずり込み、浴びせかけ、押しつぶし、破滅のあなたになおも、近くにありながら遠方にあるかのようにほとんど聞こえないファンファーレを吹きならしたのだった。(429)

犬たちのパフォーマンス全体から押し寄せてくる「音楽」にすっかり打ちのめされた語り手の犬は、音楽犬たちに彼らが何をしているのか尋ねようとする。

しかし尋ねようとするやいなや、つまり、七匹の犬たちに同じ犬同士としての結びつき (Verbindung) を感じるやいなや、またしても彼らの音楽が始まり、私は我を忘れて

(besinnungslos), 自分が音楽犬たちの犠牲者にすぎないのに、まるで彼らの仲間でもあるかのように、ぐるぐると円を描いて廻り、あちらこちらに投げ飛ばされ、赦してくれとどんなに頼んでも聞き入れられず、結局、ごちゃごちゃした材木の間に押しつけられることで、音楽自体の暴力 (Gewalt) から救われたのだった (……) (430)

ここで「暴力」という言葉が使われていることに注意しよう。「音楽」は、語り手の犬の意識を失わせ(「我を忘れて」),「まるで彼らの仲間でもあるかのように」、そのパフォーマンスに引きずり込む。それは語り手の犬には「暴力」と感じられる。

暴力的な音楽から解放され、距離を取って冷静に音楽犬たちの行為を観察すると、彼らが犬族の「掟に違反している」(431) ことに気づく。

というも、彼らは何というふるまいをしていることだろう。音楽ばかりなのでこれまで気づかなかったが、彼らはそろいもそろって羞恥心をかなぐり捨ててしまっている。この哀れな犬たちは、滑稽千万であると同時に無作法きわまることを行っている。後ろ脚で立って歩いているのだ。ああ、何てことだ！ 腹をさらけ出し、さらけ出した腹を見せびらかしている。そしてそれを得意がっている (……) (432)

音楽犬たちのパフォーマンスは、普通の犬が通常行う動作とは異なっている。それは日常では犬がけっしてしないようなふるまいなのである。語り手の犬にはそれが「良風美俗に対する違反 (ein Vergehen gegen die guten Sitten)」に思われ、「世の中がひっくり返ったのだろうか」(432) と自問し、呆然として「大人のくせに、大人のくせに！」(432) と何度もつぶやく。

音楽犬たちのパフォーマンスにはこのような否定的な面があるにもかかわらず、最終的には語り手の犬は彼らを肯定する。音楽犬たちの乱れたふるまいに腹を立て、罪深い行為を諷めようとして近づいていくと、再びすさまじい「騒音」が聞こえてくる。

しかし、私が外に出て、ほんの二、三跳びでもう犬たちに到達するところまで来るやいなや、またあの騒音が聞こえてきて、私を支配した。今ではもう聞き慣れていたので、がんばればひょっとしたらそれに打ち勝つこともできたかもしれない。しかしそのとき、恐ろしいが克服できるかもしれないあらゆる音の充満の向こうから、澄んだ、厳しい、絶えず平衡を保った、まぎれもなく非常な遠方から、変わることなくやってくる音が響き、ひょっとしたら騒音の中の本来の旋律だったのかもしれないが、それが響いてきて私を圧倒した。ああ、この犬たちはなんてうっとりする音楽を創り出しているんだろう。(432f.)

犬たちの音楽がどんなに探究犬の日常的意識を解体する暴力的な性格を持っていたとしても、また彼らのふるまいがどんなに猥雑で、風紀紊乱的に見えようとも、そのパフォーマンスの根底から響いてくる「本来の旋律」は、語り手の犬を完全に魅了する。犬たちのパフォーマンスの本質にある美しいものを探究犬は感じとるのである。

以上のように、音楽犬たちから受けた衝撃的な印象が語り手の犬によってさまざまに語られるのであるが、人間の目から見るなら、ここでの犬たちのパフォーマンスが、サーカスなどで演じられる犬の集団による芸であることは明らかである<sup>9)</sup>。音楽が背景で響く中、犬たち自身

は互いに息を合わせて多彩なフォーメーション姿勢を取って観客に見せているにすぎない。彼らが「極度の緊張状態」(430)にあるのも、また語り手の犬の質問を無視するのも、芸をやりそこなわないよう必死に集中しているからである。犬たちが「後ろ脚で立って歩」き、「腹をさらけ出し、さらけ出した腹を見せびらかしている」ことが掟に対する違反、良風美俗に反することとされ、「罪 (Versündigung)」(432)として大げさに騒ぎ立てられるが、犬たちが立って歩いてみせているだけのことで、サーカスでのドッグショーと考えれば何の不思議もない。

カフカはドッグショーを、それを初めて見る子犬の視点から描き出す。それによって何の変哲もない犬の集団芸が異化され、いかにも不可解なものに映る。何なのかが理解できず右往左往する子犬の姿は、読者に滑稽感を喚び起こす。ただ、単なる現実の異化がこの物語の目的ではない。サーカスにおける犬たちの芸を素材として用いながら、カフカは自分の人生体験を語っているのである。

多くの研究者<sup>10)</sup>が述べているように、探究犬と音楽犬たちとの出会いは、カフカとイディッシュ語劇団との出会いを反映している。1911年の秋から翌年の冬にかけて、ポーランドのレンベルク(現在はウクライナのリヴィウ)出身を自称する東欧ユダヤ人たちの劇団<sup>11)</sup>がプラハに滞在し、公演を行った。カフカは公演を頻繁に訪れ、劇団員たち、とりわけ主宰者のイヅハク・レーヴィと親交を深めた。舞台上で歌われるイディッシュ語<sup>12)</sup>の歌や演劇に魅了されたカフカは、もっと多くの人に演劇を見てもらえるようさまざまに尽力した。1912年2月に行われたレーヴィの朗読会のためには、自ら苦手な講演まで買って出ている。

このときやってきた劇団員は全部で8名であり、ビンダーによると、「そのうちの一人は非常に若かったよう」<sup>13)</sup>である。このことは、音楽犬たちの最後尾に「いちばん小さな犬」(431)がいて、「まだ少しおぼつかない」(431)が、他の犬たちから「いちばん声をかけてもらっている」(431)とされていることと相応する。また、カフカが『探究』を書く三ヶ月前の1922年6月に別のイディッシュ語劇団がプラハを訪れており、カフカは劇団員に友人レーヴィのことを問い合わせているが、このときの劇団は音楽犬たちと同じく7名から成っていた<sup>14)</sup>。

西欧に同化したユダヤ人であるカフカにとって、ユダヤ的な伝統を依然として色濃く身にまとっている東欧ユダヤ人たちは、自らのユダヤ的根源を喚起する存在であったが、しかし他方では、自分は「もはやこのような共同体の一員ではないし、けっしてそうなれない」<sup>15)</sup>ことに気づかされることにもなる。このことは、探究犬が音楽犬たちに「犬同士の親愛感」(430)を持つが、仲間には入れずはじき飛ばされるところに示されているよう。また、劇団員たちは「文字通り手から口への極貧生活」<sup>16)</sup>を送っており、プラハで社会的上層を占めるに至った教養ある西欧ユダヤ人たちから見れば、浮浪者同然のアウトサイダーにすぎなかった。カフカがレーヴィを自宅に連れてきたとき、カフカの父親は、「犬と一緒に寝ると、蚤と一緒に起きることになる」という諺を持ち出しているが、このエピソードが一般の西欧ユダヤ人たちの見方を何よりも雄弁に物語っている。俳優たちは軽蔑され、「イディッシュ語劇は田舎芝居で、上演場所はいかがわしいところと見なされた」<sup>17)</sup>のである。探究犬が音楽犬たちのパフォーマンスを猥雑で良風美俗に対する違反と感じるところは、このような事情を反映しているだろう。ビンダーが述べているように、カフカは、「プラハの精神界で、東欧ユダヤの俳優たちと彼らによって演じられたイディッシュ語の民族劇を無条件に支持した唯一の人」<sup>18)</sup>だったのである。

レーヴィらの劇団がプラハを去って一年以上経った1913年の4月末と5月初めに、カフカは別のイディッシュ語劇を見る。同年5月2日の日記に次のような記述がある。

ジャルゴン劇の偉大なマナセ (Menasse)。音楽と和して彼が動くとき僕を感動させた何か魔法のようなもの。僕はそれを忘れてしまった。<sup>19)</sup>

マナセは『旧約聖書』のヨセフの息子に由来するユダヤ人の名前であり、おそらくカフカが見たジャルゴン劇の登場人物であろう<sup>20)</sup>。カフカはマナセの動きに「何か魔法のようなもの」を感じとっている。「僕はそれを忘れてしまった」という言葉——マナセはヘブライ語では「忘れさせる者」の意であり、カフカはそれを掛けている——は、その晩見た演劇ではなく、一年以上前のイディッシュ語劇と関連づけるべきだろう<sup>21)</sup>。「何か魔法のようなもの」を感じたカフカは、かつてレーヴィらのイディッシュ語劇から受けた印象をよみがえらせようとし、その上で「忘れてしまった」と書いているのである。

「何か魔法のようなもの」という言葉は、音楽犬たちが「音楽を魔法のように浮かび上がった」という探究犬の最初の感想、そしてまた、「この犬たちはなんてうっとりする音楽を創り出しているんだろう」という最後の感想を想起させる。それは、探究犬が音楽犬たちから受け取った「本来の旋律」に通じるものである。

このように、カフカは東欧ユダヤ人たちのイディッシュ語劇から受けた衝撃を、音楽犬たちとの遭遇として表現している。イディッシュ語劇の中に芸術の本質を感じとり、それを七匹の犬たちのコンビネーション・パフォーマンスが生み出す「虚無からの音楽」と捉えたのである。

### 3. 食物の探究とは何か

音楽犬たちが姿を消した後、語り手の犬は彼らのパフォーマンスが何だったのかを大人たちに尋ねるが、答えは得られない。そこで「徹底的に調べて解明しよう」(435)と思う。探究犬は、自分の探究を「もっとも簡単な事柄から」(436)、つまり、「犬族は何を食べて生きているのか (wovon sich die Hundeschaft nährt)」(436)という問題から始めたと言う。しかし、音楽犬たちとの出会いがなぜ食物研究へとつながるのだろうか。この連関がどうなっているのかは、この物語の中でもとりわけ不可解なことの一つである。まず、探究犬が音楽犬たちから受け取ったものの核心とは何なのかを、次いで、それが食物探究へとどうつながっていくのかを見ていこう。

語り手の犬は、音楽犬体験と食物探究のつながりについて何も説明せずに話を進めていく。これについて言及されるのは、物語の末尾、探究犬が狩人犬と出会った後になってようやくのことである。

それにあの犬たち (=音楽犬たち) においては、音楽がまず第一にもっとも目立ってはいたが、私には彼らの沈黙の本質 (ihr verschwiegenes Wesen) の方が音楽より重要に思われた。彼らのすさまじい音楽に似たものはほかにはまったく存在しないかもしれず、無視することもできたが、彼らの本質は、私は当時からどこにでもいるどんな犬の中にも見つけた。犬たちの本質に入り込むには、食物の研究がもっとも適切であり、回り道なしに目標に通じていると私には思われたのだった。(481)



探究犬は、「音楽」よりも「沈黙の本質」の方に注目したという。そしてそれは、音楽犬だけでなく、「どこにでもいるどんな犬の中にも」あるものと言われている。この「沈黙の本質」を究明するために、探究犬は食物の研究に向かったのである。

ただ、「沈黙の本質」は「どこにでもいるどんな犬の中にも」とあるとされる。なぜ探究犬は他の犬たちではなく、音楽犬たちに大きな衝撃を受けたのか。それは音楽犬たちが他の犬たちとは異なり、そのパフォーマンスによって自分たちの本質をもっとも純粋な形で表現していたからである。探究犬が魅惑された「本来の旋律」とは、音楽犬たちの「存在の本質」の表出だったのである。

しかし、「存在の本質」の探究が、なぜ食物の研究と結びつくのか。このことを理解するために、食物探究の意味について考えてみよう。

「犬族は何を食べて生きているのか」という問いが研究の出発点である。これについては、「水を撒き、耕すと、大地は食物を与えてくれる」(438)ということでも誰かが納得している。しかし、探究犬はさらに問う、「大地はこの食物をどこから手に入れてくるのか」(438)と。探究犬はこの問いをもって、「世の中をあちこち走り回って質問をあびせかけ」(439)るが、この問いの意味は他の犬たちには理解されない。「みんな私の質問を喜ばなかったし、すべてばかげた質問だと見なした」(440)のである。

しかし、探究犬は食物に関する問いの重要性を強調する。

これはもちろん、簡単な問題ではないと言ってよいだろう。私たちは太古からその問題に携わっている。それは私たちの思索のいちばんの対象であり、この分野での観察や実験や見解は数かぎりない。それは一つの学問になっており、その対象とする領域は広大無辺で、個々の学者の理解力ばかりでなく、すべての学者たちの理解力を合わせたものも越えており(……)(436)

「犬族は何を食べて生きているのか」という問題は、それをめぐって「太古から」無数の考察が積み重ねられてきたにもかかわらず、いまだ解明には至っていない、犬族にとってもっとも本質的な問いとされている。

「犬族は何を食べて生きているのか」という問いは、それ自体奇妙な問いである。犬族が「大地からの食物」によって生きていることを当然のこととしているならば、そもそもこのような問いは生じない。このような問いが生じるのは、犬族が生きているのは本当に「大地からの食物」によってなのかという疑問があるからである。犬族の生を支えるもっと根本的なものがあるのではないかと思っているからこそ、「大地はこの食物をどこから手に入れてくるのか」とさらに問うのである。探究犬の食物探究とはつまり、犬族は何によって生きているのかについての哲学的な探究を意味している。それは、犬族の生を支えているのは本当は何なのかという問い、犬族は「大地からの食物」という物質的な糧によってではなく、何かもっと別のものによって生を支えられているのではないかという問い、すなわち、一言で言えば、犬族の実存への問いである<sup>22)</sup>。ただ、この問いが「ばかげた質問」として普通の生活者に理解されないのは当然であるとも言える。

探究犬は、音楽犬たちとの出会いによって、彼らの「存在の本質」を予感し、それが彼らの「生きる糧」となっていることを知る。こうして、犬族の生の根拠の研究を開始する。それは

「大地からの食物」という物質的な糧とは異なる精神の糧を求める旅である。音楽犬たちとの出会いが探検犬に食物探究を促すことになったのは、以上のような連関からである。

「本質」という言葉は、カフカがレーヴィやイディッシュ語劇団について語る際にも用いられている。1912年2月、カフカはレーヴィのために朗読会を企画する。朗読に先立って、カフカは自らイディッシュ語についての講演を行っている。イディッシュ語を低俗な混成言語として否定的に見る西欧ユダヤ人たちの見方を覆そうとしたのである。以下の引用に出てくるジャルゴン<sup>23)</sup>は、イディッシュ語と同義である。

どうか静かになさっていて下さい。そうすればあなた方は突如としてジャルゴンのただ中にいることでしょう。ひとたびジャルゴンを理解したなら——そしてジャルゴンはすべてであり、言葉 (Wort)、ハシディズムの旋律 (Melodie)、そしてこの東欧ユダヤの俳優たち自身の本質 (Wesen) なのですが——、そのときあなたがたは、以前の安らぎをもはや再び認識することはなくなります。そのときあなたがたは、ジャルゴンの真の統一性を感じるようになるでしょう。あなたがたが恐ろしくなるほど強く。<sup>24)</sup>

カフカはジャルゴンの中に「すべて」を見ている。それは、「言葉」であり、「旋律」であり、「俳優たち自身の本質」であると言われる。

それから8年後の1920年、カフカは若い友人グスタフ・ヤノーホとの対話で、イディッシュ語劇団に触れている。「ウィーンの宮廷俳優」の称号を持つ著名なユダヤ系俳優ルードルフ・シルトクラウトについて、ヤノーホが「偉大なユダヤの俳優として認められています」と言ったのに対して、カフカは次のように応じている。

「しかし、彼は偉大なユダヤの俳優でしょうか。それは疑わしいと思います。シルトクラウトはユダヤ演劇においてユダヤの人物を演じます。しかし彼はもっぱらユダヤ人のためにユダヤ的に演じるのではなく、万人向きにドイツ的に演じるので、純然たるユダヤ俳優ではありません。(……) 彼は非ユダヤ人の地平を広げますが、ユダヤ人たちの存在のありよう (die Existenz der Juden) はそもそも明らかにしません。それをするのは、ユダヤ人たちのためにユダヤ的に演じる、貧しいユダヤ人俳優たちだけです。彼らは彼らの芸術によって、異国での生活がユダヤ人の本質 (Wesen der Juden) にかぶせた塵を吹き払い、隠された顔、忘却の淵に沈むユダヤの顔を、明るくはっきりした光で照らし、そうすることによって人間というものを時代の渦の中でつなぎとめるのです。」<sup>25)</sup>

カフカは、シルトクラウトがドイツ語でユダヤの人物を演じて、「非ユダヤ人」には影響を与えるだろうが、「ユダヤ人の存在のありよう」や「ユダヤ人の本質」を明らかにするのは「貧しいユダヤ人たちだけ」であると言う。カフカが引き合いに出しているのは、もちろんレーヴィらのイディッシュ語劇団のことである。

1912年の講演では「東欧ユダヤの俳優たち自身の本質」、1920年の発言では「ユダヤ人の本質」と、ユダヤ性が強調されているが、必ずしもユダヤ人のことだけをカフカが重視していると理解する必要はないだろう。というのも、1920年の発言では「そうすることによって人間というものを時代の渦の中でつなぎとめるのです」と述べられ、人間一般の問題とされているか

らである。イディッシュ語の俳優たちの場合は、自分たちの本質がユダヤ性にあることを自覚し、それをもっとも的確に浮かび上がらせることに心を砕いて生きている。それぞれの人間がそれぞれの置かれた状況の中で、自身の「本質」をもっともよく表現することが肝要なのである。

ではカフカの場合はどのようにして自身の「本質」を表現するのか。それは劇団員たちのような演劇ではなく、文学の領域において、つまり「書くこと」によってである。

カフカがイディッシュ語劇の公演を頻繁に訪れていた時期にあたる、1911年12月13日の日記に次のような言葉見られる。

久しぶりに書くことを始めるとき、僕は虚無の空中から (aus der leeren Luft) 言葉を引っ張り出す。<sup>26)</sup>

音楽犬たちが「虚無の空間から (aus dem leeren Raum)」音楽を生み出すように、カフカも「虚無の空中から」言葉を引き出そうとする。

半月あまり後の1912年1月3日の日記には「本質」という言葉も登場する。

書くことが僕の本質のもっとも実り豊かな方向であるということが、僕という有機体の中で明らかになったとき、すべてがそこへと殺到し、性への、食べることへの、飲むことへの、哲学的思索への、そして何よりも音楽への喜びに向けられていたすべての能力を空っぽにしてしまった。僕はこれらすべての方向においてやせ衰えた (abmagern)。<sup>27)</sup>

ここでは「書くことが」が、カフカの「本質」の「もっとも実り豊かな方向」であると明確に自覚されている。イディッシュ語演劇に触発されて、カフカが急速に「書くこと」へと傾斜していつていることがわかる。

他方で、「書くこと」への集中は、生を楽しむこと、つまり、「生きること」全般における衰弱をもたらしたとも言われている。カフカにおいては文学と生が融和することはなく、常に二律背反的である。「やせ衰えた」という言葉が示しているように、カフカは「書くこと」と「生きること」という対立を、しばしば「食べないこと」と「食べること」の対立に譬える。典型的なのは『断食芸人』の主人公、断食芸人で、断食する自分の姿を芸として人々に見せることで生きている。「食べないこと」が芸なのであり、ここでは生から距離を取ることと芸術が表裏一体のものとなっている。

「書くこと」と「生きること」の対立は、探究犬においては食物研究と生の享樂の対立に反映されている。

私は若い犬であり、心の奥底ではもちろん渴望が燃え、人生を楽しむことを望んでいたが、あらゆる享樂 (Genüsse) を断念し、楽しいことはみんな回避し、誘惑には頭を両脚の間にうずめて、仕事に取りかかった。(444)

食物研究への没頭は生の享樂の排除と不可分なのである。そして探究犬もやがて、断食芸人と同じように、研究を徹底するために自ら断食を敢行するに至る。

以上見てきたように、探究犬の食物探究とは「書くこと」の寓喩である。その目的は、生の根柢である「存在の本質」を究明することである。探究犬が「食べることを当然視している犬たちの間であって「食べることを研究すること」に打ち込むように、カフカは「生きること」に疑問を持たない人々の間で「生きることの意味を追求すること」に専念する。「書くこと」によって「存在の本質」を探究するのであるが、その探究自体がカフカにとっては自身の「存在の本質」の表出となるはずである。そのようにしてカフカは自己実現を図ろうとするのである。

## 注

- 1) Emrich, Wilhelm: *Franz Kafka*. 9. Aufl. Königstein i. Ts. 1981, S. 163.
- 2) Winkelman, John: *Kafka's Forschungen eines Hundes*. In: Monatshefte 59, 1967, S. 204-216.
- 3) Robertson, Ritchie: *Kafka. Judentum, Gesellschaft, Literatur*. Aus dem Englischen von Josef Billen. Stuttgart 1988, S. 359.
- 4) Alt, Peter-André: *Franz Kafka, Der ewige Sohn, eine Biographie*. München 2005.
- 5) Nicolas Berg: 3.3.5 <*Forschungen eines Hundes*>. In: Engel, Manfred / Auerochs, Bernd (Hrsg.): *Kafka Handbuch. Leben – Werk – Wirkung*. Stuttgart u. Weimar 2010, S. 333.
- 6) 断食芸人の断食が「書くこと」の寓意であることは、拙論『断食芸人』——書く人として生きる——(上江憲治・野口広明編著『カフカ後期作品論集』同学社, 2016, 77-108 頁)を参照のこと。
- 7) 拙論「カフカの『ある犬の探究』——歌う犬とミレナ——」(『大分大学教育福祉科学部研究紀要』第37巻, 第1号, 2015, 43-58 頁)。
- 8) 『ある犬の探究』の引用は, Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Jost Schillemeit. Frankfurt a. M. 1992, S. 423-482 による。本書からの引用は本文中に頁数のみを挙げて示す。なお, 訳は拙訳である。
- 9) Winkelman, a. a. O., S. 204f.
- 10) たとえば, Binder, Hartmut: *Kafka-Kommentar zu sämtlichen Erzählungen*. München 1977, S. 267ff. Massino, Guido: *Kafka, Löwy und das Jiddische Theater*. Aus dem Italienischen von Norbert Bickert. Frankfurt a. M. u. Basel 2007.
- 11) 実際にレンベルク出身かどうかは不明。Massino, a. a. O., S. 23f.参照。
- 12) ドイツ語にヘブライ語やスラブ語などが混入してできた言語で, 東欧ユダヤ人たちの共通語。
- 13) Binder, a. a. O., S. 269. これは俳優ピーペスの息子(同じく俳優)のことであり, カフカは日記で彼を「若い方のピーペス (der j. Pipes=der junge Pipes)」, 「まったく無邪気な若いピーペス」と呼んでいる。Kafka, Franz: *Tagebücher*. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. 1990, S. 203 u. 234.
- 14) Massino, a. a. O., S. 26f.
- 15) Pawel, Ernst: *Das Leben Franz Kafkas. Eine Biographie*, aus dem Amerikanischen von Michael Müller, Reinbek bei Hamburg 1990, S. 248.
- 16) Pawel, a. a. O., S. 278.
- 17) Wagenbach, Klaus: *Franz Kafka*. Reinbek bei Hamburg 2015, S. 83.
- 18) Binder, a. a. O., S. 267f.
- 19) Kafka, *Tagebücher*, a. a. O., S. 558.
- 20) カフカは Menasse と綴っているが, Manasse のことであると考えられる。
- 21) マッシーノも, この日記の記述には, 「一年前に遡るあの晩の感情が, 一瞬ではあるが, もう一度現れている」と述べている。Massino, a. a. O., S. 26.
- 22) Winkelman もまた, 探究犬を, 「実存の意味 (the meaning of existence)」を求める存在とみ

- る。(Winkelman, a. a. O., S. 207) ただし, 彼の場合, 結局は神の啓示によってそれは与えられる。
- 23) ジャルゴン (Jargon) は, 一般的には特定の集団で用いられる言語や隠語のことであるが, ここではドイツ語を話す人々から粗野な言葉として軽蔑的に見られてきたイディッシュ語を指している。
- 24) Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente I*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. 1993, S. 193.
- 25) Janouch, Gustav: *Gespräche mit Kafka. Aufzeichnungen und Erinnerungen*. Frankfurt a. M. 1981, S. 85f.
- 26) Kafka, *Tagebücher*, a. a. O., S. 292.
- 27) Kafka, *Tagebücher*, a. a. O., S. 341.

## Kafkas *Forschungen eines Hundes* (1)

— Musikhunde und Nahrungsforschung —

SASAKI, Hiroyasu

### Abstract

Kafkas *Forschungen eines Hundes* von 1922 sind fragmentarisch geblieben; der Verfasser spiegelt in dieser Fabel sein Leben. Hier soll zweierlei geklärt werden. Was für ein Problem durchzieht diese Erzählung? Zum anderen: Wie sind die verschiedenen Episoden miteinander verknüpft?

Einen ersten Anhalt liefert die Begegnung des erzählenden Forscherhundes mit den Musikhunden. Hier kommt Kafkas Erschütterung durch das jiddische Theater der Ostjuden zum Ausdruck, und dieser seelische Schock reizt ihn zum 'Schreiben' an. Die Nahrungsforschung des Forscherhundes ist nichts anderes als eine Metapher für diese schreibende Form der Selbstäußerung des Schriftstellers, und wenn das Fabeltier die Nahrung der Hundeschaft problematisiert, wird die Frage nach der Bedeutung der menschlichen Existenz als solche aufgeworfen: wodurch wird sie ermöglicht, wodurch unterstützt?

【Key words】 Musik, das jiddische Theater, Schreiben, Existenz